

数学指導上の注意点 (行列・行列式の場合)

藤島 勝弘*・菅原 道弘**

Remark on Teaching Mathematics
(In Case Matrix and Determinant)

Katsuhiro FUJISHIMA, Michihiro SUGAWARA

要 旨

行列及び行列式は、線形代数の主要なテーマの1つである。最近の学生の課題や試験の答案から、この分野において、行列式の扱いをもう少し重視すべきであること等がわかった。

Abstract

Matrix and determinant are one of main themes for linear algebra. Reading recent student's reports and examination papers, we found that we must make a point of teaching determinant in this field.

1. はじめに

苫小牧工業高専では、おおむね、2年生の後期から3年生の前期にかけて、行列及び行列式の基礎と応用を2単位で扱っている。我々は長年、数学教育に携わってきたが、最近の学生の課題や試験の答案から、指導上さらに注意を要する点がいくつか読み取れた。ここに具体例を示すとともに、指導上の注意点を述べる。

2. 問題と解答例

課題や試験に出題した問題と学生の解答例をいくつか示す。

(1) 問題1

行列 $\begin{pmatrix} -2 & 5 \\ 3 & -4 \end{pmatrix}$ によって表される1次変換

によって直線 $y=mx$ が直線 $y=mx$ 自身に移されるとき m の値を求めよ。

[解]

$$\begin{pmatrix} x \\ mx \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -2 & 5 \\ 3 & -4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ mx \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -2x + 5mx \\ 3x - 4mx \end{pmatrix}$$

$$\therefore \begin{cases} -2x + 5mx = x \\ 3x - 4mx = mx \end{cases}$$

従って $3x = 5mx$

$$\therefore m = \frac{3}{5}$$

(2) 問題2

3つのベクトル $\vec{a} = \begin{pmatrix} 2 \\ 4 \\ -3 \end{pmatrix}$, $\vec{b} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$, $\vec{c} = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ から

作られる平行六面体の体積 V を求めよ。

[解]

$$V = \begin{vmatrix} 2 & 1 & -1 \\ 4 & 0 & 0 \\ -3 & 1 & 1 \end{vmatrix} = -4 \begin{vmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 1 \end{vmatrix} = |-8| = 8$$

(3) 問題3

次のベクトルの組は1次独立か1次従属かを調べよ。

$$\vec{a} = \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 4 \end{pmatrix}, \vec{b} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 3 \end{pmatrix}, \vec{c} = \begin{pmatrix} 5 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}$$

[解]

$$\begin{vmatrix} 2 & 1 & 5 \\ -1 & 1 & 2 \\ 4 & 3 & 3 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 2 & 1 & 5 \\ 0 & 3 & 9 \\ 4 & 3 & 3 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 2 & 1 & 5 \\ 0 & 3 & 9 \\ 0 & 1 & -7 \end{vmatrix} = 2 \begin{vmatrix} 3 & 9 \\ 1 & -7 \end{vmatrix} = -60 \neq 0$$

よって 1次独立である。

*助教授 一般教科

**教授 一般教科

(4) 問題 4

次の行列の固有値、固有ベクトルを求めよ。

$$A = \begin{pmatrix} 6 & -1 & 5 \\ -3 & 2 & -3 \\ -7 & 1 & -6 \end{pmatrix}$$

$$[\text{解}] \begin{vmatrix} 6-\lambda & -1 & 5 \\ -3 & 2-\lambda & -3 \\ -7 & 1 & -6-\lambda \end{vmatrix}$$

$$\begin{aligned} &= (6-\lambda)(2-\lambda)(-6-\lambda) - 21 - 15 \\ &\quad + 35(2-\lambda) + 3(6+\lambda) + 3(6-\lambda) \\ &= -(\lambda-1)(\lambda-2)(\lambda+1) \\ &= 0 \end{aligned}$$

$\therefore \lambda = 1, 2, -1$ (固有値)
(固有ベクトルについては省略する)

(5) 問題 5

正方行列 A について、次のことを証明せよ。

λ が A の固有値のとき、 λ^2 は A^2 の固有値である。

[証明] A を対角化行列 P で対角化すると

$$P^{-1}AP = D \text{ (対角行列)}$$

$$\text{このとき } P^{-1}A^2P = D^2$$

ここで A と $P^{-1}AP = D$ の固有値は一致し

A^2 と $P^{-1}A^2P = D^2$ の固有値は一致する。

$$D = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix} \text{ であれば } D^2 = \begin{pmatrix} \alpha^2 & 0 \\ 0 & \beta^2 \end{pmatrix} \text{ なので}$$

λ が A の固有値ならば λ^2 は A^2 の固有値である。

(6) 問題 6

直交行列 A の表す直交変換を f とするとき、任意のベクトル $\vec{P}$ について、次式が成り立つことを証明せよ。

$$|f(\vec{P})|^2 = |\vec{P}|^2$$

[証明] A は直交行列なので $|A| = \pm 1$

$$\therefore |A|^2 = 1$$

$$\therefore |f(\vec{P})|^2 = |A\vec{P}|^2 = |A|^2 |\vec{P}|^2 = |\vec{P}|^2$$

3. 出題のねらいと注意点

(1) 問題 1 について

行列 $\begin{pmatrix} -2 & 5 \\ 3 & -4 \end{pmatrix}$ は正則であるので、この 1 次変換は

1 対 1 対応の変換である。従って直線 $y = mx$ の任意の点 (x, mx) の像が、また直線 $y = mx$ 上にあればよい。ところが、学生は、直線 $y = mx$ が直線 $y = mx$ に移ることを点 (x, mx) が点 (x, mx) に移ると考えている。直線が同じ直線に移ることと点が同じ点に移る違いを明確にする必要があった。

[解 1] 直線 $y = mx$ 上の任意の点 (x, mx)

のこの変換による像は

$$\begin{pmatrix} -2 & 5 \\ 3 & -4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ mx \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -2x + 5mx \\ 3x - 4mx \end{pmatrix}$$

点 $((-2+5m)x, (3-4m)x)$ が直線 $y = mx$ 上にあればよいから

$$(3-4m)x = m(-2+5m)x$$

任意の x について成り立つので

$$3-4m = m(-2+5m)$$

$$\therefore 5m^2 + 2m - 3 = 0$$

$$\therefore (5m-3)(m+1) = 0$$

$$\therefore m = \frac{3}{5}, -1 \dots \dots (\text{答})$$

[解 2] 直線 $y = mx$ 上の任意の点 (x, mx)

のこの変換による像を (x', y') とすると

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -2 & 5 \\ 3 & -4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ mx \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -2x + 5mx \\ 3x - 4mx \end{pmatrix}$$

$$\therefore x' = (5m-2)x$$

$$y' = (-4m+3)x$$

2 式より x を消去すると

$$y' = \frac{-4m+3}{5m-2} x'$$

($m = \frac{2}{5}$ は題意に不適、よって $m \neq \frac{2}{5}$)

従って直線 $y = mx$ は直線 $y = \frac{-4m+3}{5m-2}x$ に移る。
これが直線 $y = mx$ に等しいので

$$\frac{-4m+3}{5m-2} = m$$

$$\therefore m = \frac{3}{5}, -1 \dots \dots (\text{答})$$

(2) 問題 2 について

体積 V は行列式の値の絶対値に等しい。従って

① 先ず 行列式の値を求め

② 次に $V = (\text{行列式の絶対値})$

とする。行列式の値がそのまま V となるわけではない。平行四辺形の面積についても同様の注意が必要である。

$$[\text{解}] \begin{vmatrix} 2 & 1 & -1 \\ 4 & 0 & 0 \\ -3 & 1 & 1 \end{vmatrix} = -4 \begin{vmatrix} 1 & -1 \\ 1 & 1 \end{vmatrix} = -4(1+1) = -8$$

$$\therefore V = |-8| = 8 \dots \dots (\text{答})$$

(3) 問題 3 について

行列式の値が 0 となるかならないかで、1 次従属、1 次独立を判定する問題である。学生の解は第 2 行を 2 倍したものに第 1 行を加えているので行列式の値が等しくない。行列に対する行基本変形と行列式の性質を混同している。違いを明確に

把握させる必要があった

$$[\text{解}] \begin{vmatrix} 2 & 1 & 5 \\ -1 & 1 & 2 \\ 4 & 3 & 3 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 0 & 3 & 9 \\ -1 & 1 & 2 \\ 0 & 7 & 11 \end{vmatrix} = -(-1) \begin{vmatrix} 3 & 9 \\ 7 & 11 \end{vmatrix} = -30 \neq 0$$

よって1次独立である…… (答)

(4) 問題4について

学生の解は正しいのであるが、「行列式をみると直ぐにサラスの方法」から卒業して欲しい。共通因数が出るよう工夫することが大切であるし、三角行列式が出てくると真に簡単になる。

$$[\text{解}] \begin{vmatrix} 6-\lambda & -1 & 5 \\ -3 & 2-\lambda & -3 \\ -7 & 1 & -6-\lambda \end{vmatrix} = 0$$

(第1列) + (第3列) $\times$ (-1) :

$$\begin{vmatrix} 1-\lambda & -1 & 5 \\ 0 & 2-\lambda & -3 \\ -1+\lambda & 1 & -6-\lambda \end{vmatrix} = 0$$

(第3行) + (第1行) :

$$\begin{vmatrix} 1-\lambda & -1 & 5 \\ 0 & 2-\lambda & -3 \\ 0 & 0 & -1-\lambda \end{vmatrix} = 0$$

$$\therefore (1-\lambda)(2-\lambda)(-1-\lambda) = 0$$

$$\therefore \lambda = 1, 2, -1 \text{ (固有値) } \dots\dots (\text{答})$$

(固有ベクトルは省略)

(5) 問題5について

「 $f(t) = a_0 + a_1 t + a_2 t^2 + \dots + a_n t^n$ とする。 λ がAの固有値であれば、 $f(\lambda)$ は $f(A)$ の固有値であることを証明せよ。」の前段の問題の1つである。学生の解はなかなか面白い。残念なのは、対角化できる場合についてのみ述べている点である。

例えば $A = \begin{bmatrix} 2 & 0 \\ 1 & 2 \end{bmatrix}$ は正則行列Pによって対角化

できない。それにも拘わらず、Aの固有値は2で、 A^2 の固有値は4である。

$$[\text{証明1}] \lambda \text{がAの固有値なので } |A - \lambda E| = 0$$

$$\begin{aligned} \therefore |A^2 - \lambda^2 E| &= |(A - \lambda E)(A + \lambda E)| \\ &= |A - \lambda E| |A + \lambda E| \\ &= 0 \end{aligned}$$

よって λ^2 は A^2 の固有値である。

$$[\text{証明2}] \text{ 仮定より } A\vec{x} = \lambda\vec{x} \ (\vec{x} \neq \vec{0})$$

$$\begin{aligned} \text{このとき } A^2\vec{x} &= A(A\vec{x}) = A(\lambda\vec{x}) \\ &= \lambda A\vec{x} = \lambda(\lambda\vec{x}) = \lambda^2\vec{x} \end{aligned}$$

よって λ^2 は A^2 の固有値である。

〔証明2〕は大変理解しやすい。この方法で λ^3

が A^3 の固有値であることも、 λ^n が A^n の固有値であることも容易に証明できる。従って後段の証明も可能になる。

(6) 問題6について

直交変換はベクトルの長さを変えないことの証明を問うた。すなわち「Aは直交行列である(従って ${}^tAA = A{}^tA = E$ (単位行列)を満足する)という仮定から $|f(\vec{p})|^2 = |A\vec{p}|^2 = |\vec{p}|^2$ を導くことが出来るか」ということである。学生の証明では、「A, Bがn次の正方行列であるとき $|AB| = |A||B|$ 」を用いて $|A\vec{p}| = |A||\vec{p}|$ としているのではないか? 例えば

$$A = \begin{pmatrix} \cos \frac{\pi}{6} & \sin \frac{\pi}{6} \\ \sin \frac{\pi}{6} & -\cos \frac{\pi}{6} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\sqrt{3}}{2} & \frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & -\frac{\sqrt{3}}{2} \end{pmatrix} \text{ のとき } |A| = -1$$

となる。このとき $|A\vec{p}| \neq |A||\vec{p}|$ である。

$$\begin{aligned} [\text{証明1}] \quad |f(\vec{p})|^2 &= |A\vec{p}|^2 = (A\vec{p}) \cdot (A\vec{p}) \\ &= {}^t(A\vec{p})(A\vec{p}) = ({}^t\vec{p}{}^tA)(A\vec{p}) \\ &= {}^t\vec{p}({}^tAA)\vec{p} = {}^t\vec{p}E\vec{p} = {}^t\vec{p}\vec{p} \\ &= \vec{p} \cdot \vec{p} = |\vec{p}|^2 \end{aligned}$$

このあと $|f(\vec{p})| \geq 0, |\vec{p}| \geq 0$ なので $|f(\vec{p})| = |\vec{p}|$ となるところである。学生にとっては、 $|\vec{p}|^2 = \vec{p} \cdot \vec{p}$ はわかるが $\vec{p} \cdot \vec{p} = {}^t\vec{p}\vec{p}$ がわかりづらい。行列の積の所でもう少し練習させるべきであった。次に別証明を示す。Aが2次または3次の正方行列の場合 $|A\vec{p}|^2 = |\vec{p}|^2$ 確かに実感するが、3次の場合でも手間が大変である。また、一般の場合は、わかり易いとは言えない。〔証明1〕の簡潔さは驚きである。

〔証明2〕

i) Aが2次の正方行列の場合

$$A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{pmatrix} \text{ とおくと } {}^tAA = E \text{ より}$$

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} a_{11}^2 + a_{21}^2 & a_{11}a_{12} + a_{21}a_{22} \\ a_{11}a_{12} + a_{21}a_{22} & a_{12}^2 + a_{22}^2 \end{pmatrix} &= \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \\ \therefore \begin{cases} a_{11}^2 + a_{21}^2 = 1 \\ a_{11}a_{12} + a_{21}a_{22} = 0 \\ a_{12}^2 + a_{22}^2 = 1 \end{cases} &\dots\dots \textcircled{1} \end{aligned}$$

$$\text{次に } \vec{p} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} \text{ とおくと } |\vec{p}|^2 = x_1^2 + x_2^2$$

$$A\vec{p} = \begin{pmatrix} a_{11}x_1 + a_{12}x_2 \\ a_{21}x_1 + a_{22}x_2 \end{pmatrix}$$

$$\begin{aligned} \therefore |A\vec{p}|^2 &= (a_{11}x_1 + a_{12}x_2)^2 + (a_{21}x_1 + a_{22}x_2)^2 \\ &= (a_{11}^2 + a_{21}^2)x_1^2 + 2(a_{11}a_{12} + a_{21}a_{22}) \\ &\quad \cdot x_1x_2 + (a_{12}^2 + a_{22}^2)x_2^2 \end{aligned}$$

も明確化できるし、固有値を求めることも容易になる。その結果、行列の対角化及びその応用も容易に習得できる。

- (2) 不動直線の問題に関しては、同時に不動点の問題も扱い、違いを明確化する。

使う行列を $\begin{pmatrix} 1 & -2 \\ -3 & 0 \end{pmatrix}$ とするなど、固有値が 1 でないものとするのがよい。

- (3) 平行四辺形の面積や平行六面体の体積の問題では、行列式の値が負になるもので練習する。

以上限られた時間の中でどう扱うか、大いに工夫しなければならない。

参考文献

- 1) 田河生長他：線形代数、大日本図書 (2001)
- 2) H. アントン：やさしい線型代数、現代数学社 (1994)
- 3) 小寺平治：初めて学ぶ線形代数問題集、現代数学社 (1997)
- 4) 青木利夫他：改訂線形代数要論、培風館 (1989)

(平成14年11月27日受理)

